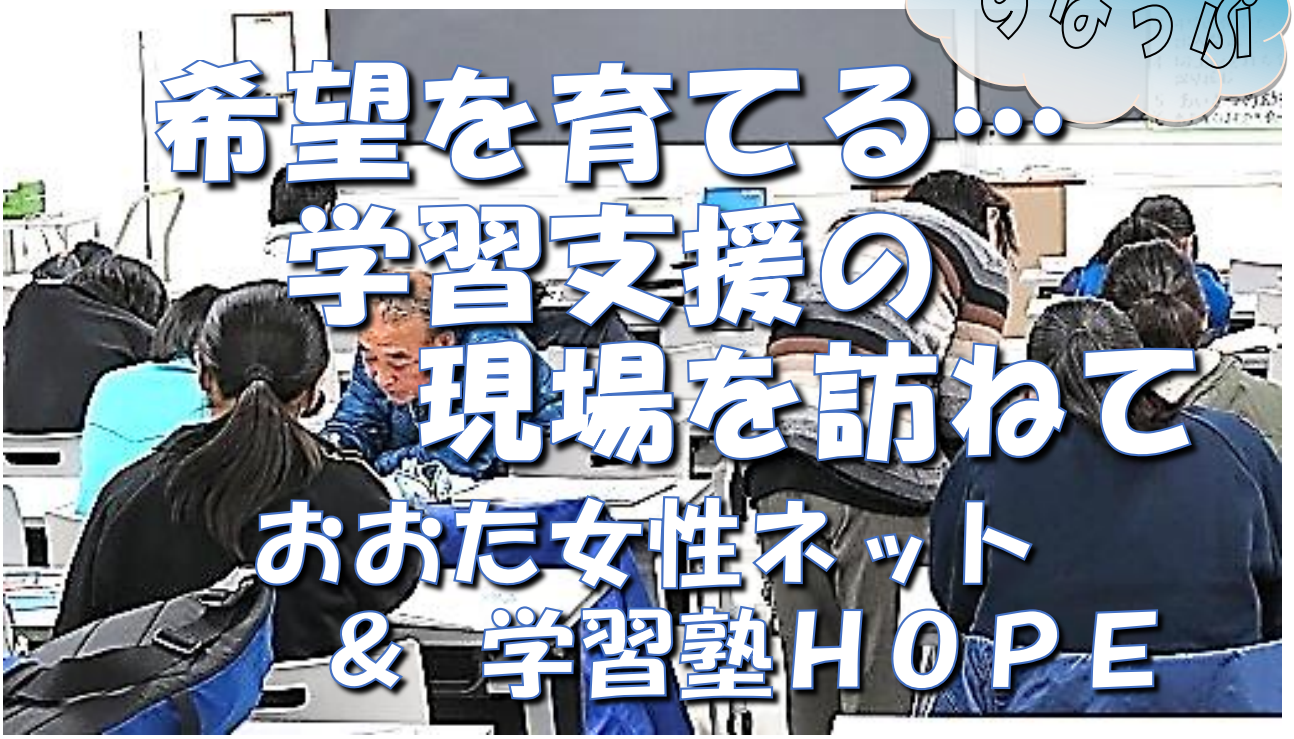
さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題をふだん着のままで紹介するシリーズ

すなっぷ



希望を育てる…学習支援の現場を訪ねて

おおた女性ネット＆学習塾ＨＯＰＥ

経済格差が社会の隅々にまで影を落としています。多くの人々が苦しい生活を強いられていますが、とりわけ貧困が子どもたちの学力や心のあり方に与えるマイナスの影響は小さくありません。そしてそのことが将来の進学や就職に不利を招き、大人になってからの貧困にもつながってしまうと心配されています。

そんな中、全国各地でさまざまな形の子ども支援が行われていますが、群馬県内各地でも始まりました。今回は、太田市と高崎市で活動している二つの団体を訪問しました。

おおた女性ネット無料学習会（太田市）

暮れの１２月５日、NPO 法人おおた女性ネットの無料学習会を訪問しました。会場は太田市の中心街にあるテクノプラザおおた・群馬大学大学院理工学府太田キャンパスです。白を基調とした明るくモダンな建物の研修室を借りて、週３回（月・水曜日は１９時～２１時、土曜日は１５時～１７時）学習支援を開催しています。

お知らせのチラシには「ひとり親のお子さんたち（小・中学生から高校生）、不登校のお子さん、日本語に慣れていない外国人のお子さん、貧困家庭のお子さんたちを対象に」と書いてあります。

副理事長の宗像さゆりさんにお話しを伺いました。

＜始めたきっかけは？＞

一番ショッキングだったのが、私自身が DV の避難をした施設での体験です。そこに来る女性が連れているお子さんたちの全てが勉強がものすごく遅れていること、勉強のべの字もない状況でした。傷ついたお母さんたちがお子さんを怒鳴っていました。

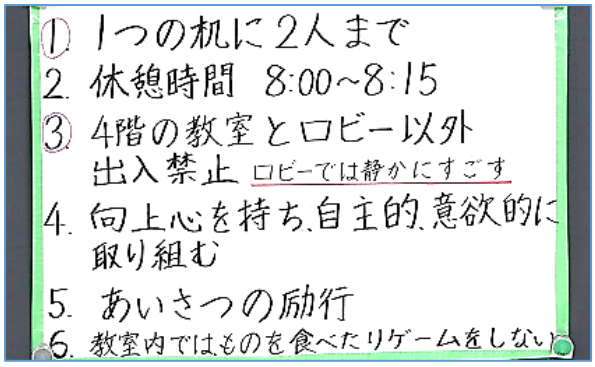
それで自分自身の離婚が成立した後に、シングルマザーのお子さんの学習支援を始めました。平成２６年４月から始めて、今３年目になります。

はじめは私の働いている所で知り合ったシングルマザーに声をかけました。彼女たちは生活のために夜も昼も働いているので、お子

さんは留守番する時間が長くなって学習する習慣がなくて、ゲームとテレビと向き合うのが長くなってしまいますから、勉強が遅れちゃってるんですね。

場所は、社会福祉協議会にかけあって福祉会館を提供してもらいました。

最初は子どもは 7 人でしたが、その後、新聞等で学習会のことを紹介してもらったり、人づてに集まるようになりました。



＜スタッフは＞

初めは私一人でしたが、あと一人、元教員の方にやってもらうようになりました。

＜財政的な基盤は＞

全て持ち出しですね。2 年前から、赤い羽根募金に応募した結果、一部援助していただけるようになりました。今年度から太田市の援助をいただけるようになりました。

＜太田市の支援はどのようにして＞

「太田市長と語る会」があったので、そこに出かけて行きました。市長さんに「こういう教育支援をしているのですが、子どもたちに顔を見せてくれませんか」とお願いしましたら来てくれました。

今年度からは、太田市が募集に協力してくれることになりました。全ての学校に在籍する太田市の教育支援対象の子どもたちに無料学習会のことを伝えてくれています。

太田市の事業の対象となる生活保護受給世帯、就学援助世帯の児童生徒は小学 5 年から中学生まで全部で約 600 名です。そのうち、約 70 名が市内 7 か所の無料学習支援事業に参加しています。

おおた女性ネットは太田市の委託を受ける NPO 法人の中の一つとして支援対象の児童生徒のその月の出席実績に応じて、講師の謝礼を援助してもらっています。

＜この会場は？＞

ここ（群馬大学太田キャンパス=テクノプラザおおた）は 3 か所目です。生徒が増えたので市長さんにお願いして、太田市の協力という事で借りることができるようになりました。ここは市の中心部で、教室も広くて、大学院ですから遅くまで使えますので助かっています。

＜スタッフは今どのくらい？どうやって集まりましたか＞

今、全体で 26 名です。群大大学院の学生さんと、社会人講師で構成しています。

特にローテーションは決めていませんので、出たとこ勝負ですね。毎回、8 人ほどは来てくれます。土曜日は私ともう一人 2 人体制です。講師が少ないので、マンツーマンにはしてあげられないですね。生徒が毎回来てくれるようになると、なんとなくお互いにわかりあえるようになります。

＜子どもの数は＞

在籍数はけっこう多いです。小学生は 26 人いますが、実際に来るのは 10 人未満です。中学生が 47 人で、毎回来るのが 20 人くらいです。高校生の在籍が 15 人で毎回来るのが 2 人くらい。40 パーセントの出席率でしょうか。

ここが居場所になっていて、学校には行っていないけれど、ここには来るという子もいます。

＜不登校・貧困家庭の実態は？＞

一見してすぐにそれとわかります。寒いこの時期も体操着を着ていて、栄養の偏りのせいか痩せていて､太った子はあまりいません。

＜貧困の背景に DV が？＞

実際にここでは起きていませんが、DV の場合は加害者は常に被害者を追跡し、妨害をしてきます。離婚しても「面会交流」という名前でつきまとい、面会交流中に殺されてしまった被害者もいます。怯えた子どもたちが学校に行けなくなったケースもあります。ここでも DV のせいで出席率の低い子がいます。

要は、母子のセットで引き上げないといけないので、DV 被害者の自助グループをやっています。月に一回、被害者たちと交流会をもち、同じような気持ちをわかり合うことで心の傷も浅くなってきます。それに合わせて子どもたちも元気になってくるのです。

＜教える中味は＞

中学３年生は高校受験が目標ですが、なにしろ基本的なことでつまずいちゃうと英語と数学は大変です。教科書、参考書や問題集などの教材をこちらで揃えています。

＜子どもたちの変化は＞

素晴らしい成果が出ますね。成績は確実にアップしていますし、先日、日本新聞協会の新聞コンクールで、新聞記事から感じたことを作文にした生徒が奨励賞を取ったりしています。とても嬉しいです。

＜今後の展望は＞

とにかく継続しかないと思っています。ここでの学習が定着してここを卒業した子どもたちが自立をしてくれることを願っています。

＜宗像さんの情熱はどこから＞

他に思いつかなかったですね。自分自身の喪失が一番大きかった。自分の傷が深くて、結果論ですが、誰かのためにやることで自分の心を維持することができる自分を助けることができると、その一心だったんですね。

たった独りから始めた宗像さんの深い想いと願いに触れて、頭が下がりました。

おおた女性ネット『無料学習会』訪問記

須田　章七郎

実に静かな研修室というのが印象的でした。ジャージを着た子たちが真剣に学習に取り組んでいました。研修室１では中学生と高校生が約２０人、学習支援者が５人。教科書や課題のプリントを大きなテーブルに広げ、熱心に学習をしていました。支援者はところどころのテーブルに座っては質問に答え、丁寧に接していました。研修室３には小学生が８人、支援者が４人。支援者の説明に２～３人が集まって聞いていました。とにかく真剣さが伝わってきます。

支援者の一人である大学院生にこの活動に加わった理由を聞くと、大学の先生からの後押しもあったので引き受けたと言っていました。月と水の２回来ているようで、教えることで自分の学習の再確認になっていると言います。年齢も近いので趣味の話もできること

が良い関係を築いているようです。

群馬県高等学校退職教職員の会（高退教）の会員の青木梢さんも支援者の一人で、彼女は「学習支援だけではなく、精神的支援も行っている」と言っていました。困難な家庭環境で、大きな傷を持った子どもたちに精神的支柱としての存在は大きいと思いました。

宗像さんは、今後の展望として「仕組みが確立すること、ここを出た子どもたちが将来、社会を支えてくれる存在になれば」と言っていましたが、一人で始めたこの支援がこうして広がっていることを目の当たりにすると、凄まじい執念をもってやれば道はきっと出来ていくだろうということを強く感じました。

ＮＰＯ法人学習塾ＨＯＰＥ（高崎市）

１２月１３日の夕方、学習が始まる１時間ほど前にＨＯＰＥの拠点である高崎市下小塙町の高崎経済大学付近の民家を訪れました。ここは代表である髙橋寛さん所有の建物で、５つの部屋を教室として使用しています。事務所を兼ねる台所で食卓をはさんで高橋さんからお話をうかがいました。

はじまりは

高校教員として働いていたころから子ども支援をしたいと考えていました。退職後、教育委員会など、行政当局に出向いて相談してみたけれど実現の道を見つけることはできませんでした。そこでちょうど 5 年前の 2011 年 12 月数人のグループで相談し、ここで小中学生を対象とした学習支援を始めることにしました。翌１月に任意団体として学習塾ＨＯＰＥのスタート準備を進めました。目的は経済的な理由で塾に行けない子どもを支援することとしました。

ボランティア活動であること

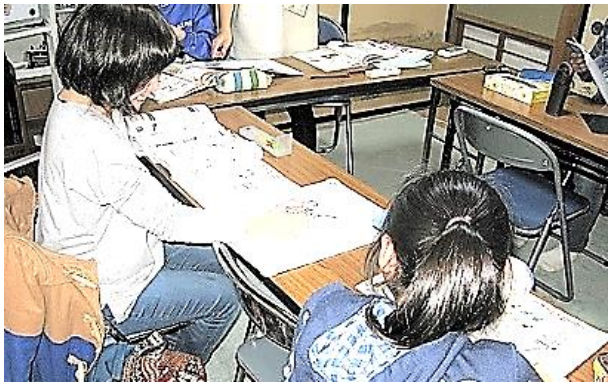
しっかりした支援組織を作ることがとても大切ですが、ボランティア活動に参加してくれる人がなかなか見つかりません。それでも教員経験者や教員志望の大学生などが参加してくれてここまでやってきました。講師料は支払っていません。

無料であることで他の学習塾との摩擦を避けることを第一としました。ふつうは受講料をとってビジネスとして経営しているわけですから。だから支援を始める前にはかならず親子と面談して、趣旨をわかってもらい、無料での学習支援を生かしてまじめに取り組むことを約束してもらいます。

心が通う学習支援

支援の過程で気づかされるのは子どもたちが経済的困難だけでなく精神的な厳しさにも直面していることです。もちろん、生活は苦しくても温かい家庭で育っている子どももいますが、中にはなかなか厳しい状況にいる子どももいます。学習支援の場は時には子どもの話を聞く場にもなります。そこで私たちは個別指導を基本にしての学習支援を心掛けています。時には指導時間のほとんどを使って子どもの話を聞くこともあります。学習場面によっては集団指導が効果を発揮することもありますから個別指導が最善であるとは言いませんが、子どもと一対一で向き合うことの大切さは否定できません。

長い教職経験のあるボランティアも、「自分が求めていたのはこれだ」と言い、大学生講師は中学生から「高校に入ってもＨＯＰＥに来たいと言われて嬉しかった」と、信頼されることの喜びを語りました。人と人が心でつながることが両者にとって意味があることを物語っています。



2016年ＮＰＯ法人化

2016年5月からＮＰＯ法人化しました。基本方針は変わりませんが、支援者としての会員が増えて現在 37 人。教員や塾講師経験者、大学生などです。また、教室も拡充されて現在高崎本校のほかに「井野」「吉井」「倉賀野」「安中」「松井田」「玉村」各教室で支援が行われています。

ＮＰＯ法人化は多少の手続きの大変さはありますが、財政的、物質的、その他さまざまな支援を得るためには必要なことでした。高崎市のホームページにも市民への広報を担ってもらっています。

子ども食堂からの支援に感謝

2016年11月からは高崎子ども食堂さん（高崎市井野町：代表石北さん）から支援をいただけるようになりました。火木金の指導日の8時以降、高崎教室と井野教室にごはんとみそ汁を提供してくれるのです。勉強を終えた子どもと指導者が温かい食事をいただきます。考えられないようなありがたい支援で、心から感謝しています。

課題は山積

組織は大きくなってきましたが課題は山ほどあります。財政的にはいつでも首の皮一枚でつながっている状態です。年度末には企業や組織に援助を申請する仕事に追われます。ＮＰＯ化して講師陣にほんのわずかな交通費を支払うことができるようになりましたが講師料はゼロです。ボランティアの基本という理解で辛抱していただいています。

講師の確保には頭を悩ませています。子ども支援の機運が高まってきたとはいえ、自分の時間をボランティア活動に捧げる決意をしてくれる人は多くはありません。高崎経済大、県立女子大、高崎健康福祉大の学生さんたちには感謝しています。

一方で困っている子どもはまだまだたくさんいます。困っている子どもの近くに支援する人がいればもっともっと数多くの教室を開設したいと思っています。

指導会場の確保も大きな課題です。しかし最近、自治体の社会教育担当者の理解を得て公民館や勤労者センターを借りることができるようになりました。

自治体からの財政支援や教育委員会との連携にはまだまだ乗り越えなければならない課題があるかもしれませんが、子どもたちが安心して話せる場所、安心して勉強に取り組める場所を提供することを目指して、今は私たちができることを積み上げていくことに専念したいと考えています。

ボランティア学習支援活動にようこそ！

ＮＰＯ法人学習塾ＨＯＰＥ　代表　　髙橋　寛

今年度5月より、私達のボランティア活動は NPO としての法人格を取得しました。4 年間の任意団体としての活動を受け継ぎ、新しく法人としてのスタートを切りました。12 月現在、高崎本校以外に、「井野」「吉井」「倉賀野」、安中市の「安中」「松井田」、玉村町の「玉村」の合計七教室で支援を行っています。それぞれの教室には、その地域在住の講師が教室長として活動の中核になることを原則として活動しています。

そこで、問題なのが講師不足です。学生講師ももう少し欲しいところですが、それ以上に社会人講師が不足しています。特に元教職関係者や元公務員等、地域住民に支えられて退職までこぎつけることができた方々、そのような方々からのボランティア講師希望がなかなか出てきません。

ここで皆さん、振り返ってみて下さい。誰でも、どんな年齢になっても自分の人生は自分だけのものではないということを。私達は皆、生まれてからずっと周囲の人々から様々な支援を受けてきました。とりわけ人生の大半を地域社会の沢山の人々に支えられて公的な職を得、生計を立てて来られた方々にとって、地域社会からは並々ならぬ支援を受けてきたのではないでしょうか。

退職後は、家族の中では介護等の諸事情が身に降りかかってきていることは十分想像できます。一方で、「手当てが無いから」という理由でボランティア活動に乗り気になれないという話も見聞きします。退職後は自分の人生（余生）を好きなように過ごしたいという考え方もあるでしょう。どんな人生の仕上げをするかは本人の自由で、誰も口をはさむことはできません。ただ、もしご家庭の事情が許すなら、ボランティア活動に対して「一歩前に」踏み出してはいかがでしょうか。特に、現在どの地域においても、将来のある子ども達には様々な支援が必要とされています。とりわけ生活に困っている子ども達にしてあげられる支援について、積極的に考えていただければ幸いです。

学習支援の観点から、また地域を支える住民の１人として、ボランティア講師へのチャレンジはいかがでしょうか。

【高橋さんへの連絡先は 027‐362‐6178　又は 090‐4392‐9469】

取材を終えて…子どもの貧困の実態を知る人に出会った…

私たちぐんま教育文化フォーラムが群馬県子どもの権利委員会や教育ネットワークぐんまと共同で取り組んでいる子どもの貧困の問題の理解を深めるための取材でしたが、県や自治体の支援の具体化がなかなか進まないのとは対照的に民間の取り組みが充実してきている実態を目の当たりにする結果になりました。ここに取り上げた二つの団体ともに子どもを取り巻く厳しい実態に直接向き合いながら活動をしています。このような活動をもっともっと市民や行政に伝え、成果や課題を踏まえて支援のさらなる充実に生かしていく必要を感じました。

お二人の無私の精神に貫かれた奉仕の姿勢には心打たれました。おからだを大切にして子どもたちの希望を育ててください。取材を受け入れて下さった関係者や生徒の皆さんに心から御礼申し上げます。

《取材/撮影：瀧口典子・須田章七郎・針谷正紀（太田）倉林順一・平井敏久（高崎）》